博士（人間科学）学位論文　概要書

子どもの社会的葛藤解決行動の発達的研究

A developmental study on young children’s conflict resolution at nursery

２００９年１月(後期日程の場合)

早稲田大学大学院　人間科学研究科

広瀬　美和

HIROSE, Miwa

研究指導教員：　根ヶ山　光一　教授

本論文の目的は，保育園における自然観察から，子どもの社会的葛藤解決行動を抽出し，その構造を明らかにし，幼児期におけるそれらの発達的変化を検討することである。子どもの社会的な葛藤については，子どもの社会構造や社会的スキルを反映すると評価され，研究が盛んに行われている（たとえば Strayer & Strayer，1976；斉藤ら，1986； Shantz，1987）。その結果，社会的葛藤が子どもの社会性の発達において積極的な機能があることが示されている。その背景にあるのは，子どもたちが，乳児期には主に大人側の配慮によって意図を汲み取られつつ相互作用し，他人との葛藤を経験することが少ないが，幼児期の仲間関係では，互いに拙いコミュニケーションスキルによって，問題のある相互交渉を経験し，葛藤を展開するようになることがあげられる。

また，集団内の葛藤は霊長類研究においても関心を集めてきたが，近年では葛藤そのものよりも，いわゆる仲直りや和解，調停などの，葛藤解決や第三者個体による葛藤管理の行動の方に注目が移っている(沓掛，2002)。それらの知見や研究手法はヒト幼児の研究にも応用され，年齢により仲直り頻度が上昇する（Fujisawa et al.，2005）ことや，文化によっては友人関係や血縁関係など社会価値が仲直り頻度に影響を与えること（たとえば Butovskaya & Kozintsev，1999；Verbeek & de Waal，2001）などがわかっている。

しかし，これまで葛藤解決行動は，葛藤後も当事者がその場に留まった場合を対象として検討されてきた（たとえば Hartup et al.，1988）ため，いったん当事者同士が離れた後の葛藤解決の生起を過小評価してしまっていた可能性がある。また和解や仲直りは，親和的・向社会的行動として研究が行われ（たとえば Eisenberg，1992），子どもの葛藤解決研究は，謝罪や話し合いといった行動に限定されがちであった。また，子どもが泣いたり大人が介入した場合は，その時点をものわかれによるいざこざの終結としたり，「大人側からの」介入として処理し，子どもの能動性を無視してきた。

そこで，従来の葛藤解決行動にとらわれずに，子どもの集団がどのように葛藤を解決しているのかを探り，その構造を明らかにするために，行動が限定されにくい保育園での自然観察を行った。

第 2 章では，自然観察から仲直り方略が抽出され，他者を巻き込んで構造を変化させたり，周囲の人間を操作したり，いざこざを収束させるだけでなく，遊びにまで発展させるなど，当事者間の相互作用に留まらないダイナミックな構造であることが示された。

第 3 章では，葛藤解決行動がどのように発達的変化をするのかについて，3 年間の縦断観察によって検討された。その結果，方略の使用頻度の変化というより，子どもが方略の選択の際に拠りどころとする集団規範や，相手や周囲の意図を読み取る能力が変化し，集団生活の経験を積み，集団成員の特性についての理解が深まるといった発達的変化を見せることが示唆された。

第 4 章では，慰撫効果があると指摘される身体接触の，葛藤解決場面における意味が検討された。子どもの葛藤解決においては，慰撫としてだけでなく和解を周囲にアピールしたり，第三者や当事者間が相手の怒りや緊張の状態を測るために道具的に用いられていることが指摘された。

第 5 章では，特にこれまで葛藤解決に積極的な意味を見出されにくかった「おどけ」行動や，「介入要請」や「劣位性の表出」といった順位枠組の導入の，葛藤解決における意味が検討され，解決法略として適用しうる可能性について探索された。

本研究で主に観察の対象としたのは，ある私立保育園のみであり，保育環境や文化の違いによって，構造や発達は異なるのかを今後検討する必要があるため，第 6 章では予備的研究として英国 Edinburgh 市の保育園の観察により，今後比較研究を行う意味が検討された。

本研究では自然観察による解釈的アプローチが試みられたが，総合論議では，あらためて子どもの集団規範や意図のやりとりなどの質的な変化や，大人にとって望ましいばかりではない子ども本来の姿を読み取ることの意義が論じられた。また，子どもの葛藤解決行動には，従来から指摘されてきた社会的カテゴリや社会的規則といった社会的コンピテンス（木下,1982；Shantz,1987;Corsaro,1985）や，心の理論（Premack & Woodruff,1978），あるいはメタ・コミュニケーション（Bateson,1973），役割取得（Flavell et al.,1968;Selman,1971）等の社会的，認知的な能力が関係しており，社会的葛藤やその解決の発達とは，それらの獲得過程，発達過程であるということについて論じられた。